



TITLE:

琉球國先島列島を訪ねて

AUTHOR(S):

蒼天生

---

CITATION:

蒼天生. 琉球國先島列島を訪ねて. 地球 1933, 20(3): 207-216

ISSUE DATE:

1933-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184195>

RIGHT:

て明にされる可きである。

菜崎・大丹生兩層は概ね五十度以内の傾斜で褶曲して居る。鮎川・大丹生間では大丹生層に東西の軸を有する向斜と背斜とがあり、小丹生から菜崎に至る間では菜崎・大丹生兩層共北西に單斜してゐる。然るに三本木以東及び丹生郡糸生村では兩層共概ね北又は北東の傾斜を有す

## 琉球國先島列島を訪ねて

琉球おぢやるなら

草鞋はいておぢやれ

琉球は石原小石原

と語れてゐる別天地の島國、琉球はどんな處であらうか。

我々はお伽断などで聞いてゐる。浦島太郎の龍宮の様に全く異國かとの先入觀念に捉はれてゐた。今の度び機を得て、目のあたりに、琉球國の種々な物事に會つて、始めて、眞の國を知り、多くの誤つた觀念を脱する事を得た。

筆者は本誌の一隅を借りて宮古群島・八重山群島の所謂先

琉球國先島列島を訪ねて

る。斷層は可成多く、且此等の第三紀層堆積後に噴出した安山岩が諸處に分布して居るから、此等第三紀層の詳細な層序の決定は將來の調査に俟たねばならない。

擧筆するに當り種々御指導を賜つた中村・横山兩先生、且類査定に御教示を受けた黒田先生並に野外調査に種々御便宜を計られた福井中學校堀教諭に深謝の意を表する。

## 蒼 天 生

島列島を主として(沖繩本島に出掛ける人は多く、従つて可なり文獻等にもある故略す)書き、今後此の地に足を印する人の幾分でも益する事があれば、誠に幸とする處である。

沖繩縣の氣候産業や地質學的事項は、略して沖繩名物の一端を見てみよう。

島は小さいが、六十有餘島が百數十海里に點在してゐるだけ、動植物其の他珍らしいものが多い。雪を見た者が無い常夏國だけあつて、蒲

葵<sup>アヲ</sup>(方言クバ)や、千なり瓢箪の様に密生してゐるババヤ、臺灣産の物より小さくて味のよいバナナ、赤い美しい實のなる蘇鐵、一年中手に得られるト

マト・胡

瓜・グロ

テスクの

茄子や、

マスクメ

ロン等一

寸本州か

ら來た者

が喜ぶも

のがとて

も多い。

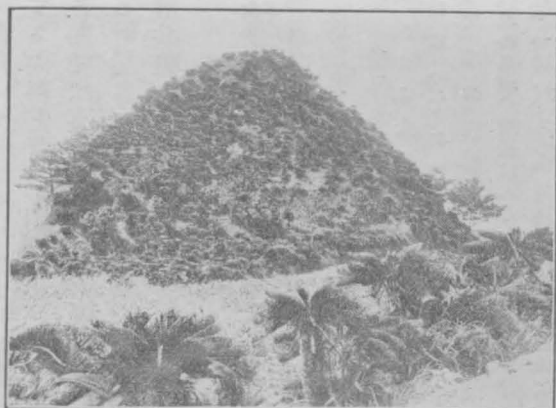
路傍に

は熱帶氣

分の濃厚な

氣根の垂れる

第一圖 蘇鐵



フクギ

ガジュマル

赤い花が咲く梯梧<sup>タイゴ</sup>、無數の

海岸や山奥に密生してゐる

第二圖

ガジュマル 樹 榕



阿且など珍木が少くない。

與那國産の大綾錦と云ふ世界一の蛾が居り、木葉蝶は沖縄本島や八重山森林に多く、此の外色彩の美しい昆蟲や魚類等相當居て、自然と熱帶地方に居る事が分る。

近年産業及經濟的見地から研究する人々が多く、養蠶原種製造・藥草栽培・果樹・茶其の外觀賞用花卉種栽植、眞珠養植等各方面の施設が行はれてゐる。

溫室などの設備に金を用ひなくても、作物が年中生育し、然かも他府縣より早く出來るから機先を制する地の利を得てゐる。

只問題は、なるべく運賃を低廉にする工夫であらう。

以上の外名物黒糖、國產ウイスキーの名ある香氣芳烈な泡盛や、織物界に王座を占めてゐる上布、沖縄獨特の漆器等、土産物として好適のものが多い。

以上の様であるから、最近自然科學者を始め藝術家等は南島の自然に憧れて、陸續として來訪する様になつた。

聽ては、文藝家も來て、潜める島の傳説を研究しに探訪する事であらう。

### 宮古群島

宮古群島は宮古島の外七島からなり、沖縄本島の南方に位してゐる。

今宮古群島に屬してゐる八島の周圍・面積・人口を列舉してみよう。

島名	所屬	周圍	面積	人口	一平方 人口 密度
宮古島	平良	103,873	147,912	46,133	333
城下地邊					

琉球國先島列島を訪ねて

池間島	平良	11,000	16,333	1,524	55
大神島	同上	1,850	2,000	110	30
來間島	下地	2,031	2,633	170	27
伊良部島	下地	2,073	2,633	455	77
下地島	伊良部	2,627	2,633	805	128
多良間島	多良間	16,304	18,633	3,865	203
水納島	同上	6,000	18,633	1,500	150

以上各島とも、珊瑚礁からなつてゐて、地質的に極めて單調で、坦々たる平野を歩くといふに過ぎない。

宮古島は群島中で最も中樞の地を占め、宮古唯一の漲水港は西岸大浦・與那覇兩灣の中間に位し、前に伊良部島を控へ、北に池間、南に來間を擁してゐるが、水淺く且、風波が突進しても碇泊するに不便を免れない。

生産業としては、只砂糖・紺上布と水産業が主に、別にトマト・西瓜の栽培も進歩してゐるが、未だ検査所が設立されてゐない爲め島外に輸出が出来ず、島内で消費してゐる位である。若し、夫れが設立された曉には、どし／＼五月頃から之等が内地で得られることと思ふ。

宮古神社境内に宮古紺上布の創始者稻石女の記念碑を建て永久に、彼女の遺跡を後世に傳へてゐる。

之に關して面白い傳説がある。稻石は不地親雲上眞榮の妻で、賢婦の譽高く、夫君は州鎌村與人の職にあつり、或る日公用を帶びて他村に赴き、歸途逆風の爲め、明國に漂着し進貢船に便乗して歸途についた。然るに又洋中颶風に襲はれて危機に頻したが、眞榮は逆卷怒濤を冒して船の修理に努め、其の功に依つて下地村の頭役を授けられた。此の光榮に浴したので妻稻石は恩に酬ひんと日夜考へ、遂に綾錆布を製出したのである。

眞榮は之を王に獻じ、親雲上の位に昇り爾後年々之を奉つたのである。

### 八重山群島

八重山郡は東經百二十四度三十分、北緯二十五度五十二分より東經百二十二度五十六分、北緯二十四度三分に亘る間に散在する大小十九の

島嶼からなつてゐて、周圍が七十里二十二町、面積四十三方里餘に及び、沖繩縣の總面積の約四分の一に相當してゐる。大なる島は石垣島・西表島で之に次いでと與那國島である。臺灣を除いては本郡が最南に位す、東西南北の極所地を示すと次の様である。

#### 極所

東	大濱村字平久保	東經一二四、二〇
西	與那國村與那國	東經一二二、五六
南	竹富村字波照間	北緯二四、〇三
北	石垣町字登野城	北緯二五、五二

#### 島嶼の周圍及び面積

島嶼名	周圍	面積
石垣島	二二、三三	一六、七五
西表島	一九、二二	二〇、八七
與那國島	七、〇〇	二、〇四
波照間島	三、二六	〇、九七
黒島	三、〇九	〇、八九
竹富島	二、一八	〇、四一
小濱島	一、一八	〇、六八
新城上地島	一、一四	〇、一三
新城下地島	一、〇七	〇、〇二
鳩間島	一、〇三	〇、〇七
内離島	一、三一	〇、一六

外離島	一、〇九	〇、〇九
中御神島	〇、三二	〇、〇一
嘉彌真島	〇、二九	〇、〇三
魚釣島	?	〇、二八
久場島	?	〇、〇七
北小島	?	〇、〇二
南小島	?	〇、〇三
大正島	?	?

縣下で一番詩情に富んだ八重山郡の沿岸については、随分研究されてゐる様であるが、筆者は八重山支廳から得たものより拔萃して參考のために紹介してみやう。

本郡は元獨立の酋長國にして、管内には各種の富源を擁し、自給自足をなしたる爲め、他と交通するを好まざりしが、元中七年即ち紀元二千五十年後龜山天皇の御代始めて琉球國中山蔡度王に朝貢し、爾來百餘年間、民禮を盡せしに明應九年大濱村於屋計赤峰及保武丸の二人叛心を懷き貢物を中山王に絶つこと三、四年なりしが、永正元年(紀元二千百六十四年)中山王は大里按司を大將とし宮古島仲宗根豐見親父子を先

琉球國先島列島を訪ねて

導として之を平定し、豐見親の二男眞列金なる者戦功に依り八重山島頭に任ぜらる。宮古・八重山兩先島の頭職此の時より始まる。其の後寛永六年(紀元二千二百八十九年)始めて行政の區劃を定め、八重山を大濱・石垣・宮良の三間切に分割して村分をなし、本島出身の頭を置き、所謂三頭政治を行はしめたりしが、同九年在番を置きて之を統治せしめたり。

當時我國に於ては耶蘇教を禁止せる時なりしが本島に南蠻船渡來し耶蘇教を布教するものあり、偶々南蠻船漂着したるを以て幕府は薩藩をして之を討捕らしめんとし兵を向けたるも、南蠻船は既に出帆逃亡せし後なりしと云ふ。此年(寛永十八年)より慶安二年に至る九年間之等外寇に備ふるため薩州は大和在番を駐在せしめたり。

爾來三百年、此の間享保十七年(紀元二千三百九十二年)には野底村・高那村を新設し、同十九年には屋良部村・南風見村を、寶曆三年(紀元

二千四百三十三年)には安次良村を、同五年には崎山村を新設して人口の分布を按排し、殖産興業を圖りたるも明治八年大海嘯ありて九千八百八十人を失へり。政廳は之が回復を計らんとし寄百姓制を制定し、住民の移住を行ひしが、安政五年以來大飢饉に遭遇し、次で癘疹疫癘等ありて死者多く人口漸減し、其の後幾多の變遷を経て、明治十二年廢藩置縣となれり。

明治十四年、八重山島役所を設置して統轄せしめ、明治二十九年沖繩縣郡の編成に依り八重山郡を置き、八重山島役所を廢し、同時に八重山島廳を設置せられたり。

明治三十六年地租條例及國稅徵收法施行せられ、從來の人頭稅は茲に廢止せらるゝことゝなれり。越て明治四十一年、間切制を廢し、沖繩縣島嶼町村制施行せられ、同年八重山村を設置して一郡一村としたるも時世の進運に伴ひ、治務上不便尠からざりしを以て大正三年八重山村を廢し、石垣・竹富・大嶺・與那國の四ヶ村に分村

せり。大正九年、普通町村制實施せられ、大正十五年、郡制の廢止に依り、八重山島廳を廢し支廳を設置し、同年十二月石垣村に町村制を施行したり。

## 地勢

本郡は東西三十四里であるが、大小の島々から成つてゐる關係上、海岸線の延長は七十里に及んでゐる。

石垣島は北方に最高峯於茂登嶽(二六八〇尺)が屹立して之を中心として東西一帯に山脈を形成してゐる。南方は本島唯一の平夷地で數千町歩の原野耕地があり、殊に海岸に接する部分は概ね平坦で交通上便よく、又名藏川・宮良川・羣川等があつて水利の便もよい。本島程、地質の複雑な處はなく、北部及び北北東部は火山地帯に古生紀、南部と西南部は沖積地・古生紀・隆起珊瑚礁等からなつてゐる。

西表島は未開地として、又沖繩縣の倉庫とされ、島は略々長方形をして、山岳重疊し、僅か

に南東及び北方の一部に平坦なる處があるのみで此の部分は隆起珊瑚礁よりなり、農業地となし得る處は少ない。

小濱島・竹富島・黒島・新城島・波照間島、凡て珊瑚礁地多く、甘蔗の栽培を主とする外見るべきものがない。

## 人口

今から八十年前寶曆三年には、人口二萬六千二百八十五人で、明和八年には三萬六千四百三十二人となつたが、同年三月海嘯の爲め、九千百八十人を失ひ、安政五年から同七年に亘る三年間の饑饉に逢つて餓死した者が千五十二人、嘉永六年迄の間は麻疹疫癘の爲め、死亡した者四千四百七十五人で、文久二年には人口僅かに一萬千二百十六人を數ふるに過ぎなかつたが、明治六年には、一萬千九百二十六人となり、昭和五年には三萬五千八十一人に増加し、漸く百六十年前の人口に達したと云はれてゐる。

## 産業

琉球國先島列島を訪ねて

本郡は土地が廣く、且つ肥沃で常夏の氣候故沖縄の寶島と稱せられるが、未だ經營方針及び耕作方法が極めて幼稚で收量が割に少ないので自給自足が得られず、郡經濟上に脅威を受けてゐるのであるが、昨今技術員の燃ゆる研究心と努力に依つて一光明が見え出したと聞いてゐる。

産業中、最も盛なのは甘蔗作で、之は明治二十年頃から始まり、次第に斯業に志す者多く、優良品種を栽培し、各島とも競つてその發展策を講じてゐることは誠に喜ばしい。

此の外畜産業も自然の牧草に富み、家畜の好飼料たる甘藷は年中生産し得る故、之れ亦有望視されてゐる。

## 氣候

本郡の氣候は、ラヂオで常に聞いてゐる様に所謂亞熱帶の常夏の氣候で加之海洋性氣象である爲め、氣溫が高く、暑氣間が甚だ長い。空氣は濕氣に富み、多雨多濕で、曇天日と雷鳴日



多い。

石垣島測候所の報告によれば、一ヶ年間の降雨總量二千二百六十一耗で、最大日量百八十七耗を示し、本郡有数の多雨地で風は甚だ強く、颱風の襲來する事が屢である。

### 交通

本島に於ける縣道は少く、僅かに石垣町附近の南方にのみ發達し、他は概ね町村民の努力に依り、其の改修を爲しつつあるが、未だ幅狭少にして車道に適するものが少い。然し新計畫案完成の曙には、本島を一周する循環線が出来て石垣島の農業も愈々發達の階梯を辿り、且つ自然に「マラリヤ」撲滅もなり、縣下唯一の寶庫島となること、信じる。

一方、海上の交通を見るに、八重山郡は那覇を去る南方二百四十二哩から三百十一哩の間に介在する群島で、縣内各地との連絡は勿論、内地及び臺灣との交通は總て船舶の便に依る外道なく、従つて此の航路の完否如何によつて郡經

濟と文化の開發に至大の關係がある故、全力をあげて之が改善に努めてゐるのは必然的結果である。然し石垣港と云へど、港内一帯に隆起珊瑚礁發達し、折角の棧橋にも船を着ける事が出来ず、止むなく遙か沖合に碇泊して小型船で連絡せねばならぬ不便がある。現在では何より第一に、直接入港し得る港を有する様にすることが急務ではなからうか。

筆者は親しく、島内を視察した結果、寧ろ石垣町の北方六軒離れた名藏灣に船舶が出入する様にし、鐵道により石垣町と連絡する計畫を立案するのも敢て暴舉でないと思ふ。

郡内の各離島間にあつては、昨今二十噸以下の發動機船を以て毎日、或は隔日又或る所では月に數回航海してゐるが、冬期とか海上の荒れた場合は、航海し得ず天候回復を待つのみである。

本州最南端波照間島に赴いた折、島民の話によれば、冬期は交通全く杜絶し、郵便・新聞等凡

て二、三月分を一度に配達されると聞き、常に島々を連絡し得る大型の船の新造される目の早いやうに願つた。

### 衛生

沖縄縣と云へば飯匙蛇とマラリヤの地の様  
考へ、又聞き傳へられたが實に此の考へは、縣民にとつては迷惑至極で此の地に對して認識不足者の誇大的言葉に過ぎない事

### 卵とプハ圖三第



を知つた。

石垣島のマラリヤ地帯と稱しても僅か北海岸の一部分に過ぎず、他の地は肥沃な原野で、大いに活動せんとする若人に與へられた土地である。本郡に「マラリヤ」の流行した古い記録はないが、人の話によれば、西表島の英傑慶田城祖納當が首里大屋子であつた頃（今から約六百年前）和蘭船が同島に漂着して以來「マラリヤ」の流行を見たと言はれてゐる。

本郡の「マラリヤ」は他府縣に比し病勢が強く遂に大正十一年「マラリヤ」豫防班を設けて、之の防遏に盡瘁し、大正十五年マラリヤ防遏所の事務を擴張して徹底的治療に努めてゐる。

未だ北海岸の浮梅村・伊原間村は依然として流行し、野底村の如きは六十戸近くの人家も、病の爲め倒れ、或は外に移住し、爲めに今は老婆獨り淋しく山中に生活し、附近は過去の石垣や井戸が尙殘存し、部落全滅して廢墟となつてゐる。此の姿は西表島の古見村でも見るが、他

には全くなく、此處遠からぬ裡にマラリヤも完全  
に防遏せられることを確信する。

## 住 民

最後に簡単に島民の生活状態について述べや  
う。

沖繩本島民と同様、常食は勿論甘藷で、米食  
は年に數回のみ、それも殆んど臺灣米を用ひて  
ゐる。筆者が約一ヶ月宮古郡・八重山郡を調査  
中最も苦んだのは、野菜の全く缺乏せることで  
ある。朝より夕に至る迄、食膳につくるものは  
(無論、宿屋はなく民家に泊る)新鮮な魚類と鶏  
卵と泡盛である。

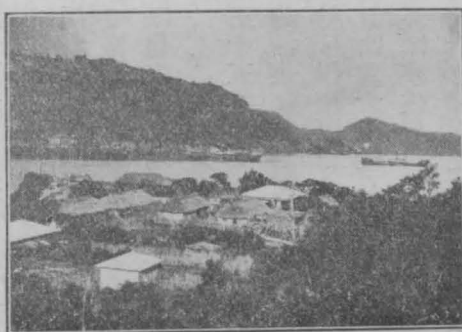
波照間島は海上に漂ふ絶海の孤島故、我々の  
訪問を心から喜び、夜を徹した歓迎會には、い  
ささか面食つた形であつた。各島々の特長を織  
込んだ歌謡を歌ひつゝ泡盛を手にした様は、實  
に朗かである。

稿を終るに際し一言加へたいのは、西表島で  
ある。此の島は一平方呎の人口密度は五人と云  
ふ所であ

るが島の  
面積は三  
二一、八  
八七米で  
船から見  
ただけで  
も何か寶  
でも潜在  
してゐる  
かの様に

## 第 四 圖

西表島を見るときから西表島を見るときから  
外離島ハナレ



常に静かな睡りを續けてゐる。

探検隊といふ様な部隊を組織して、調査した  
ら植物的・動物的に或は地史的に、多大の收穫  
が得らるると思ふ。(完)